

KSCA 会報

設立10周年記念号

Vol.15 2016.5.30

目次

PAGE 1-PAGE 5

(1) KSCA設立10周年記念寄稿
「これまでの10年、これからの10年」

PAGE 5-PAGE 7

(2) 書籍紹介

PAGE 7

(3) 今後の予定
(4) KSCA連絡先

(1) KSCA設立10周年記念寄稿 「これまでの10年、これからの10年」

KSCAとして10年、また、文部科学省の（導入当時は文部省）スクールカウンセラー活用事業導入から、丸々20年経っていることを考えてみると、スクールカウンセラー制度が、よくぞここまで発展してきたものと、感慨深いものがあります。

学校における心理臨床という、いわば未開拓の分野で、言葉を変えて誤解を恐れずに言ってみると、野戦場状態とも言い換えられる「学校の心理臨床文化」の中へ、恐るおそるスクールカウンセラーは入っていきました。学校内の相談室の運営を担い、個別の児童生徒や保護者面接をこなしつつ、それだけにとどまらず、学校の教育相談力を底上げしてゆくために、何ができるのだろうかと思いを絞ってきました。

相談室でのカウンセリング（Counseling）はもとより、ときには、授業参観（Classroom Visitation）をさせてもらい、校内委員会に参加して教員へのコンサルティング（Consultation）を行ったり、ストレスマネジメント等の予防的対応としてのコミュニケーショントレーニング（Communication Training）を教員と協働したりすることで、学校スタッフの一員として認知されてきました。

今後期待されることとして、SSWや他の相談員等、学校に入る多くの外部スタッフも含めての協働およびコンサルテーション、また、命に関わる状況での緊急支援（Crisis Response）等があると考えられます。

教育というフィールドで、いかにメンタルヘルスについての正しい理解を啓発してゆくか、そのためのノウハウや

ヒントを得るためには、例えば事例検討（Case Study）は非常に有効な手段であると考えられます。

これまでも、そしてこれからも、今ここでできそうなことから、それぞれのペースでやってゆくことができますようにと、願っています。（理事長 小見祐子）

私は2013年度より理事を務めさせていただいています。神奈川県域と横浜市において導入2年目からスクールカウンセラーを続けている私は、理事をお引き受けした当時、スクールカウンセラーの労働環境の整備が一向に進まないことに強い危惧を感じていました。また、KSCAには発足から会員登録をしていましたが、主催された研修に参加したこともなく、自分の意識の中で、KSCAはとても薄い存在でした。KSCAを通して、スクールカウンセラーに共通する課題に、個人としてではなく団体として働きかけること、そしてそれによってKSCAが、会員にとって組合のように頼りになる存在になることが、私の理事としての目標です。

理事になってから、KSCAには、臨床心理士資格に準ずるスクールカウンセラーの会員が少なくないことを知りました。資格ではなく、スクールカウンセラーという職名を同じくする人を繋ぐという点で、KSCAには他の団体にはない特徴と役割があると思います。

理事の働きとしてはまだまだ道半ばですが、最近立ち上げて今後益々力を入れていきたいと思っているのが、“スクールカウンセラー事例検討会”です。スクールカウンセラー同士でしっかり時間を取って事例を検討する場を、定

期的には持っていない方は多いのではないのでしょうか。一つの事例に対して、スクールカウンセラーとしてどう見立て、どう動くべきかに焦点化することが、この事例検討会の狙いです。昨年度3回行いました。参加者は少数ですが、内容の濃い検討会になっています。この検討会のことを広く会員に知っていただき、ぜひご参加いただきたいと思います。

会員の皆さまの声を、ぜひ理事に聞かせてください。KSCAが会員の皆さまにとって、身近で、困った時に役に立ち、頼りになる存在になれるよう、精進して参ります。
(理事 中野早苗)

KSCAが設立されて10年の月日が流れ、設立当初は神奈川県臨床心理士会のスクールカウンセラー部門の下部組織という位置付けであり、その後の現在の様な別団体として存続している。

この10年で学校をめぐる課題は複雑多様化して、いじめの問題で自死するまでに至ってしまうことや、虐待の被害者である児童生徒の安否確認をすることを学校が求められたり、発達障害への対応を学校が急がねばならないような状況である。

そして、「脱ゆとり教育」の流れの中で、公立高校の入試制度も変わり、長洲知事時代の置き土産である「100校計画」で作られた高校が再編統合で変遷していつている。

このような10年の流れの中で私達スクールカウンセラーは何か出来たのであろうか、社会環境面への働きかけのために導入されてきているスクールソーシャルワーカーとどのような棲み分けをしていくことになるのだろうか。私は社会環境面への働きかけはスクールソーシャルワーカーの仕事だからスクールカウンセラーは手を出さずにいいとは思わない。任せるためにこそ社会環境面の問題への研鑽を積んで、まずはスクールソーシャルワーカーが出番を無くすほどに仕事の範囲を広げられることが必要と考えている。互いの職域を侵害するのではなく、真の協働をするために、相手の仕事を知ることが必要であり、相手にどう動いてほしいのか伝えられるために、もっともっと教育における心理臨床・ソーシャルワーク臨床を統合発展させていく必要があるのではないかと考えている。そして病院臨床・教育委員会の設置する相談室における臨床のほうが専門的と考えられるような仕事でよいのだろうか、また福祉事務所や児童相談所の出先機関を学校に作ることでないのではないかと考える。

「チーム学校」というスローガンのもとに、この国の教育が、私達の勤務する学校がどのように変わっていくのかをよく見定めて、私達のJobとしての仕事を守りつつ、今

までのKSCAにおける積み重ねにさらに磨きをかけて、真に学校の一員となれるようなスクールカウンセラーを目指していきましょう。(理事 角田友二)

法人立ち上げの10年前、SC西湘ブロックの世話人をさせていただいていたところ、「理事のあたま数が必要なので、名前だけ貸してほしい」というお話をいただきました。

(名前だけなら……)という軽い気持ちでお引き受けしてしまいましたが、実際理事会に出席し、理事や運営担当の方の話を聞いていると、NPO法人運営に関する法律や税務関係の用語や知識が、ごく当たり前の一般常識のように語られているのを目の当たりにし、いつも理事会ではとても場違いな場に顔を出しているように感じ、気まずい思いをしていた記憶があります。

皆さん普段は自分と同じSCとして仕事をされている方々(のはず)なのに、なんでこんなに法人運営のノウハウを身に着けているんだろう...と、とても不思議に感じていましたが、そこにはスクールカウンセラーという職種の今後について危機感を抱いている方々の思いがあり、「自分たちのことは自分たちで」という強い当事者意識が、何も知識のないところから法人立ち上げという偉業の達成につながっていたことを知りました。

このように、法人立ち上げスタッフの偉業に感心しているだけの私でしたので、何かお役に立たなければと思っていたところ、理事会で、法人の事務局を置く場所を探す議題になりました。とりあえず登記上の住所だけが必要ということでしたので、(住所だけなら……)という軽い気持ちで私の勤務先の住所を登記することになりました。

しかし、ちょうど(運悪く?)運営スタッフの入れ替わりに伴い、何の知識もない私が、会計や法務関係の業務を引き継ぐこととなってしまいました。

そこからは初めての体験だらけです。事務局移転の手続きで、初めて法務局という建物に足を踏み入れました。「法務」という名前から、(法律違反を厳しくとがめられるのか...?)というイメージでハラハラしながらの手続きでしたが、とても親切に対応してくれるお役所でした。税務署から「会計について話を聞きたい」という電話がかかってきたときには、(脱税を疑われているのでは!?)と、眠れない夜もありました。書類をそろえて税務署を訪ねると、ここでも親切にアドバイスいただきました。

(実際に問題ありませんでしたのでご安心を……)。

こうして振り返ってみると、(名前を貸すだけ……)(住所を貸すだけ...)のつもりがズボズボと泥沼……いや、NPO法人の運営にかかわることになっています。

これからの10年は、今までのような受け身の姿勢ではなく、より当事者意識を持って、法人の運営に当たっていきたいと思っています。（理事 大田隆人）

「神奈川県内にスクールカウンセリングという職能を確立し、従事者の資質向上、地位確保を図ること、スクールカウンセリングの普及・発展に資する様々な事業を通して、スクールカウンセラーを理解・活用していただき、より多くの子どもの健全育成を図れるように活動をしていくこと」という理念にご賛同いただいた多くの諸先輩方、仲間、関係機関のご協力をいただき、KSCAは平成18年に設立されました。設立準備期間は発起人の一人として、設立後は理事（当初は事務局長）として、10数年間KSCAに携わらせていただいたことになります。特に設立準備期間は、遠い昔のようにも感じられます。慣れない作業や手続きに追われ、目まぐるしい時間が流れていた印象だけが思い出され、具体的なことはどう進んでいったのか、もはや思い出せないほどです。

KSCAの活動を通して、多くの方とスクールカウンセラーの課題や望ましいあり方、未来像などを語り合いました。そして、もっとスクールカウンセリングを向上、発展させて、社会の役に立っていくという意志、スクールカウンセラーは子どもたちのことをこんなに考えて活動しているということを社会に知ってもらいたいという願い、スクールカウンセラーとして活動できることの喜びや道を切り拓いてくださった方々への感謝、をいつもいつも噛みしめてきました。それが学校臨床においてもKSCAの活動においても、現在まで続く私の原動力となっています。

現在は研修会企画や事例検討会運営などを担当しています。これからも気軽に楽しみながら企画を提案し、「役立ちそう」「やってみたい」を実現する場として、KSCAを活用させていただきたいと思っています。皆さまも、現状への不満や不安、希望や要望はありませんか。スクールカウンセリングについて語りながら、横のつながりを強めませんか。ぜひKSCAをご活用ください。難しく考えず、理事をつかまえて想いや考えを伝えてくださるだけでもかまいません。

団体での活動を維持することは、設立とは別のエネルギーが要ると感じています。今後も、会員の皆さまのご理解、ご協力、積極的なご参加をいただけましたら幸いです。（理事 杉崎雅子）

10年前にKSCAが出来た頃、ちょうど私の30代がスタートしました。

その時は理事ではなく、いちスタッフとして関わらせて頂いていましたが、失礼な話なのですが正直その時は「KSCAのスタッフがやりたかった」という気持ちがあった訳ではなく、知人に推薦され“何となく”活動していました。

その頃は、臨床心理士を取得して間もない時でしたが、念願の資格を取ったものの、具体的にどんな仕事がやりたいのかイメージも持てませんでした。そのため、これも関わった保護者や子供達に対して大変失礼な話なのですが、中途半端なモチベーションでスクールカウンセラーの仕事をしていた気がします。

そんな状態でモヤモヤとした気持ちのまま数年過ごした後、とうとう我慢が出来なくなり、スクールカウンセラーもKSCAのスタッフも辞めて、思い切ってEAP（企業の従業員向けのカウンセリング）の分野に飛び込んだのが30代後半です。そこで子供の分野だけでなく大人の相談にも関わるようになり、新しい刺激を入れるようになってから、一気に心理の世界が広がった気がしました。

そうなる前は、今まで見えていなかった人間の心理の特性や強さに気付くようになり、その事で、自分がこの分野でやれること、やりたいことが急にイメージできるようになったのです。

それからは、人が変わったように、非常にエネルギーに仕事や勉強がこなせるようになりました。その集大成が、去年11月に出版した「人は心理学で永遠に幸せになれる」という、認知行動療法を相談者層向けに、非常に分かりやすく書いた本です。近年は出版不況のため一般書を出すのは狭き門になっており、ワニブックスとの間で出版にこぎつけるまでは40社以上に企画書を出しました。まさに執念のなせる業なのですが、人は本当にやりたい事があると、こんなにもエネルギーが出て来るものなのだと思います。

現在では、自分の人生のミッションは「知識や経験を自分なりに組み合わせ、人の支援に生かすこと」だとすっかり自覚できるようになり、この臨床の仕事は、まさしくそれを実現する手段だと感じ、大きなやりがいを感じています。

そして、一時は辞めたKSCAも、今度はきちんと目的意識を持ち、理事として活動させて頂いています。KSCAも10年で様変わりし、昔は私と同じで「何となく」だったのが、今は「会員にとって意味のある活動を」という事をしっかり考える組織に成長した印象があります。

10年という月日が、人や組織を豊かに変えていけるという事を、しみじみと実感しています。（理事 村松奈美）

研究班の担当理事を務めさせていただいている稲垣智則です。

研究班では、スクールカウンセラーがどのように活動すると効果的であるか、という視点に基づいて、「スクールカウンセリングにおけるチーム支援の実際と課題」、「学校風土の形成要因に関する探索的研究」という2つの研究を行い、論文化して参りました。

「スクールカウンセリングにおけるチーム支援の実際と課題」では、実際にスクールカウンセラーとして勤務経験のある4名の心理士に、チーム支援を行った経験についてインタビューし、逐語データを元に質的分析を行いました。そこから抽出されたコアカテゴリは（A）「チーム支援を促進する要因」と（B）「チーム支援を阻害する要因」でした。チーム支援を円滑に進めて行くためには、促進要因をより活性化させ、阻害要因を取り除くことが必要です。そのためにスクールカウンセラーは、端的に情報を伝達する能力を身につけること、試行錯誤を繰り返す粘り強さを身につけること、集団・組織を強く意識すること、スクールカウンセラーの役割イメージに関する固定観念を変化させて行くこと、プレゼンテーションの力を身につけること、が必要である、という知見を得ました。

「学校風土の形成要因に関する探索的研究」では、学校風土を「人が変わっても続いていく、その学校特有の雰囲気」と定義して、学校風土が形成されるプロセスについて要因を検討することを目的としました。方法としては、複数校での勤務経験をもつ高等学校の教員8名に半構造化インタビューを行い、その結果を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析しました。分析の結果、「学校風土を形成する要因」と「学校風土の形成を困難にする要因」が抽出されました。学校風土は、歴史や教育方針、教員や生徒、社会的認知など個々の要因によって形作られている面、教員と生徒、社会的認知が力動的に関係しあい形作られていく面が見られました。一方、相反する事象として、歴史の浅さや教員の異動の多さ、教員が問題対応に迫られて生徒と信頼関係を築けないことなどが、学校風土の形成を困難にしていました。教育方針、あるいは行事や部活動等を通して、教員と生徒が信頼関係を築き、さらにその結果が社会的に認められて生徒が自信を持つという良い循環が、よりよい学校風土を形成する可能性が示唆されました。

今まで行った研究はあくまでも基礎研究でした。今後10年で、より具体的にスクールカウンセラーに役立つようなデータを収集し、分析して行きたいと思っております。

（理事 稲垣智則）

稲垣智則，齋藤梓，林幹夫，瀬戸瑠夏（2012）：スクールカウンセリングにおけるチーム支援の実際と課題，東海大学課程資格教育

センター論集，第11号，pp.1-11.

稲垣智則，林幹夫，齋藤梓（2015）：学校風土の形成要因に関する探索的研究，東海大学課程資格教育センター論集，第14号，pp. 77-83.

KSCAに関する最も古い記憶は、約12年前、KSCAの前身であるS×3（エスバイスリー：スクールカウンセラー・サポート・システム）の新人研修会を受けていた時のことである。その時私は「スクールカウンセラーをしていると、相談がなくてヒマな時もある。なぜなら学校には『弱みを見せない文化』があるため、それが相談しにくさにつながっているのではないか」という発言をした。すると「ヒマ」という言葉に反応され、他の参加者やスタッフにケチョンケチョンに言われてしまった。研修会後「さっきは大変でしたね」「ヒマな時もありますよね」と別の参加者に声をかけられ、「あ、こんな所に味方がいた」と思った。その後、声をかけてくれた方々とはS×3やKSCAのスタッフとして、現在は理事として、ともに活動している。あらためて思う。仲間は素晴らしいと。

KSCAの設立準備では教育委員会や不登校支援機関等を訪問し、また各地区研修会を回ってKSCAの説明をした。研究班では班員、班長として、日本心理臨床学会での自主シンポジウム、会報、きんたろうキャンプアンケート、研究等で、主に連絡役を務めた。

事業担当では、2007年1月から、神奈川県「いじめ110番」電話相談の夜間の部のリーダーとして、相談員の一人であると同時に、連絡役を務めている。もちろん相談対応でも大変さはあるが、個人的にはそれ以上に、他の相談員との連絡調整、総合教育センターとの交渉に力を注いで来た。幸い、他の相談員の方々にもセンターの先生方にも理解と支援をいただき、非常にやりがいがある。こちらでも仲間の素晴らしさを感じている。

今後の10年。まずはスクールカウンセラーの仕事を続け、より多くの人の力になれるように、自分の力を高めたい。それが全ての土台である。そして研究班や電話相談では、他の班員や相談員の方が実力を発揮できるように支えたい。電話相談の名称は、今年度から「24時間子どもSOSダイヤル」に変わり、より広い相談対応が求められる。児童生徒、保護者、教職員、班員や相談員など、これからの10年間で、どれだけの人の力になれるのか。自分自身、どれだけの力をつけられるのか。勝負はもう始まっている。

（理事 林幹夫）

県教委との学校緊急支援の10年間は、現場を知る人たちの思いに支えられた。2007年8月から学校緊急支援チーム構成員の中で、臨床心理士であるスーパーバイザー（以下、SV）は5名から10名体制になった。2012年度から2名増員され現在に至っている。派遣数の正確な統計は県教委へゆずるが、おおよそ月単位では4月の件数が最も多い。これはある年に報道された自死案件にSVが延べ40名以上かわり、月の数値を押し上げた。次に9月が多いのは、長期休暇明けの自死数が頻発する傾向と思い合わせられる。偶然だろうか、7月の派遣は途切れたことがない。夏休み前後をひとつのヤマと見るならば、上半期の学校への啓発活動に活かしたい。

対応事案は、事故や事件では、水難・交通事故死、自死、殺人などの死にまつわるもの。いじめや教員の不祥事など、後々の学校生活に長く影響するものもあった。

チームSVらは、それぞれ本務を抱えつつも不定期の派遣要請に応えた。時に無理もあった。県教委とメンバーとの連絡窓口を輪番制にして、チーム意識をつなぐ役割も果たしたと思う。

初動対応が主だが、中期のフォローや研修を担うこともあった。その技術を磨くには、不測の現場で揉まれる以上のものはない。加えて、月一の勉強会がある。派遣後のSVがその場でどう考え動いたかを話し共有する。県教委のSVでもある大草正信先生の実践的かつ明快な切り口による教えがあった。会を終えると不思議に現場へ向かう肚が据わる。

当の学校にとって、SVが大げさに采配をふるうより、冷えた頭でそばに居た支えが大きいようだ。派遣先の学校から後日談を聞けば、何かを「してくれた」ことより「来てくれた」声が多い。学校現場で凄惨な出来事が起きると、教員や保護者も何か「する」ことに躍起になったり、逆にすべき手当てを忘れてしがちになる。SVは、それらの行為が児童生徒にとってストレス緩和の過程になっているかを判断し、助言する。このように、SVは、児童生徒のケアのみならず、教職員や保護者のとまどいをその場

に応じて受け止めてゆく。教員や保護者はストレスケアについての見通しが持てると落ち着く。大人が落ち着くと児童生徒が日常生活に戻りやすい。

これからの10年を語るのには難しい。SVは一人派遣が多かった。人の資源にかぎりはあるが、可能なかぎりスキルの異なる複数のSVが現場に入ると精度が上がりやすいだろう。被害側が加害に転じ、その逆もある。時々刻々と変化する現場は安易なマニュアル化や概念化をゆるさない。しかし、この10年で体得したコツはいくつかある。いずれにせよ、私たちはひとつひとつの事案で試行錯誤した苦労や反省を、次の10年へ生かす使命があろう。

（学校緊急支援事業担当 辻孝弘）

きんたろうキャンプは事業開始から10年を超え、これまでの事業の積み重ねの中で、その意義や活動が周知され、年々成果があがっている。その中で、現在は参加者層の多様化や、それに伴う低年齢層やキャンプ経験の少ない参加者対象のキャンプの増加等、質的な面での変化も起きてきた。

中でも一番大きな変化は、指定管理者の交代である。

きんたろうキャンプは運営母体が5年前に交代し、人員がほぼ総入れ替えになることでキャンプの雰囲気は大きく変化した。

その中でもKSCAは引き続き関わってきた。

そして参加者の心理的援助やスタッフのサポートだけでなく、それまでのきんたろうキャンプの雰囲気を踏襲しつつ新しい団体にもその雰囲気を伝えると言う役割も持ってきたように思える。

次年度はまた指定管理者の交代がある。5年後にはまた指定管理者が交代する可能性もある。その中でKSCAは、心理面のサポートだけでなく、それまでとこれからの橋渡しという役割も担っていく必要があるかもしれない。

（きんたろうキャンプ担当 鏡元）

（2）書籍紹介

1. 鷲田清一著（2010）『新編 普通をだれも教えてくれない』ちくま学芸文庫

1993年から2008年までの、鷲田清一のエッセイ集になります。

かつて、鷲田清一が「臨床哲学」という名称を大阪大学で用いることにしたのでした。鷲田清一と対談した河合隼

雄は、会うなりいきなり、冗談めかして「パテント料をいくらくれるんや」と言ったそうです。ただ、この場合の臨床はBed Sideというより、現場で、直に感じたことを出発点とする、という意味合いが込められているようですので、少し違うところがあるのかもしれませんが。臨床心理士サイドとしては少々紛らわしい「新学問」を設定した人ですし、「あらゆる“ことば”は、哲学者・鷲田清一によって

新しい景色を見せる」という朝日新聞「折々のことば」のキャッチコピーを見ると少々距離を取りたくなってしまうことはあります（少なくとも私は）。ただ、本を読むときに、そのような距離感はとても大切のように感じてはおります。

鷲田清一は哲学者ですから、エッセイの中に「偉大な」哲学者の言葉を引用することはいくらでもできたのでしょう。しかしそれを頑なに拒否しているように見えます。おそらく、ある物事について考えるとき、哲学用語だけではなく、社会学の知識も、心理学も浮かんでしまったのだろうと思われまふ。浮かんでもなお、その知識を脇にどけて、何とか自分の地の言葉で文を書こうとしている力が感じられはします。その「脇にどけ方」が、無骨で、真摯に感じられる部分があります。

エッセイのクオリティとしてどうなのかは、私にはわかりません。小林秀雄の『考えるヒント』などと比べてしまったら、それは劣るものになるのでしょうか。エッセイでいえば、小林秀雄の切れすぎる文章ではなく、河合隼雄のやわらかく包むような文章でもなく、中井久夫の詩のような文章でもありません。何だか頑なに正直になろうとしている、そんな文章に感じられます。ある意味では、ロジャースの語り口に似ているような気も致します。

スクールカウンセラーとして様々な知識が付き、それが頭をかすめることも多いように思います。本にしても、研修にしても、様々な専門知識が入ってまいります。発達障害についても、精神疾患についても、聞いたこともない新しいジャンルのものについてであつても、何にしてもです。知識をつけることは前提なのだと思いますが、今度はその知識に振り回されてしまうこともまた、多いように思います。

そういうときに、鷲田清一のエッセイにおける「文体」は、参考になるような気がするのです。

鷲田清一がどのような方なのか、私は知りません。もしかしたら、柔和な顔の奥に狡猾さをひそめているのかもしれないし、権威主義的な方なのかもしれません。ただ、この「文章だけ」が、著者を伏せた状態で存在したとしたら、私は「なるべく自分の体験と自分のことばだけで、何とか語ろうとものがく」心意気を感じられるように思うのです。

「教育を設定したのは『おとな』なのであるから、教育の問題化はそのまま『おとな』の問題化である。今後どんな教育が必要かを考えるより、いまどんな教育をやめるかを考えたほうがいいと思う」（p.85）

この言葉は私の「耳」にずっと残っているように感じます。（敬称略）（研究班 稲垣智則）

2. ピート・ウォリス著 野坂祐子・大岡由佳監訳 （2016）『犯罪被害を受けた子どものための支援ガイド 子どもと関わるすべての大人のために』金剛出版

最初にお断りしておきますと、私は、本書の翻訳にほんの一部ですが、関わっています。そのため、宣伝になってしまうかもしれない、と危惧も抱いております。ただ、翻訳のお話をいただき、本を実際に読んだ時に「こういう本が欲しかった！」と私自身が思ったため、今回ご紹介させていただきたいと思いました。

「犯罪」と聞くと、少し大仰に感じる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、学校現場や他の臨床現場で、「いじめ」「ネットいじめ」「暴力」「デートDV」「児童虐待」「性暴力」などの被害に遭った子ども、あるいは「盗難」「器物損壊」「家庭内の暴力」によって間接的に被害に遭った子どもと接した経験は、多くの先生方がお持ちではないでしょうか。

本書は、上記のような被害に遭った子どもたちに対して、教員やスクールカウンセラーなど周囲の大人が、どのようなサポートできるかを記した本です。第一部は、それぞれの被害について、それがどのようなもので、子どもたちにはどんな徴候が見られて、周りの大人は何ができるのかが書かれています。第二部は、とても具体的に、子どもへの接し方や話の聞き方、守秘義務の考え方や警察に通報する際の注意点が書かれています。第三部では、修復的アプローチという、被害者と加害者が話し合う場の設定の仕方や注意点、また、被害に遭った子どもが加害側に転じることへの対応が書かれています。特に、学校内で行われた暴力やいじめでは、被害と加害が複雑に絡み合っていることも多く、そうした場合にも参考になります。また、巻末には、監訳者の先生方が作成された、日本での様々な相談窓口が紹介されています。

この本は翻訳本であり、読んでいるときにイギリスの制度の話や人種の問題なども出てくるので、少し違和感をいだかれるかもしれません。しかし、書かれている具体的な内容は、日本でもすぐに使えるものばかりです。たとえば、休み時間に相談室に遊びに来た子どもが、チャイムが鳴る直前に緊急に話をしはじめたとき、そしてこちらも次の面接の時間が迫っているときなど、「30秒の共感」が大切だと、本書には書かれています。その30秒は、腕時計も見ず、体を子どものほうに向けて話を聞くことが重要だということです。そして、その30秒でどのように話を聞か、ということが書いてあります。その他にも、感情と考えを確かめながら話を聞くこと、助けてくれるネットワークを視覚化することなど、日常の臨床で使えるヒントがたくさん書かれています。

子どもの被害に特化した本は、日本ではあまり多くありません。その中で、この本はとても実際の、具体的に、子どもの被害について網羅されています。（研究班 齋藤梓）

3. エイレン・N・アーロン著 明橋大二訳 (2015) 『ひといちばい敏感な子 子どもたちは、パレットに並んだ絵の具のように、さまざまな個性を持っている』1万年堂出版

みなさんは「HSC」という概念をご存知ですか？ HSCとは「Highly Sensitive Child」の略で、「人一倍敏感な子」という意味です。これは著者が心理学者として、12年にわたる気質の研究の中で、何千人ものHSC、HSP (Highly Sensitive Person: 人一倍敏感な人) にインタビューし、また数千人にアンケートした結果を専門誌に発表しました。

それによると、HSCは子どもの15～20パーセントに見られ、身体面での敏感さ（人混みや騒がしい場所を嫌がる等）、感情面での敏感さ（他の子の苦痛に深く動揺する等）、新しいものに対する敏感さ（新しい環境には常に気後れする等）、社会的に新しいものへの敏感さ（よく知らない人であるほど躊躇する等）という性質があります。

これらは生まれつきの性質ですが、発達障害でも精神疾患でもなく、むしろ敏感さを活かすことによって、様々な能力を伸ばすことができます。本書にはその多くの方法が具体的に載っています。保護者や教員向けですが、もちろんスクールカウンセラーにとっても大いに役立ちます。

実は私は、この本を不登校の子の保護者に薦められました。400ページ以上もある本なのですが、読み進めるほどにその子はもちろん、ほかの学校の不登校の子にも当てはまることが多く、発達障害とはまた異なったスケールを手にすることができました。

ただ、学校現場での理解はまだまだこれからです。先

日、ある学校で不登校の子について担任と話した時、この本を見せたところ、その先生はタイトルをただで本を手にとらず、「あの子が敏感だということですか？ ただのワガママじゃないですか？」と言いました。「環境適応が難しい+発達障害ではない=ワガママ」という図式が、学校にはまだまだあるようです。それを「=HSCかもしれない」と理解することで、救われる子どもも多いと思います。

また、本書にはこんな「目からウロコ」の文章がありました。「私たちが記憶を整理するシステムには、2種類あるとされています。自己肯定感が低く、落ち込みがちな人は、失敗した記憶をすべて同じファイルに入れているので、一つの失敗や弱点によって、自分の失敗全てを思い出してしまう傾向があります。反対に、しっかりした自己肯定感を持っている人は、失敗か成功かによって記憶を分類せず、例えば、スポーツ、学業、社会生活というように、テーマごとに分けて記憶しているので、よいことも悪いことも一緒に思い出せるのです」。これはHSCに限らず使える知識です。

最後に、この著者自身もHSPで、HSCを育てた経験があるということも大きなポイントです。その経験から、親がHSPである場合、またはHSPでない場合の、両方のアドバイスも載っています。本書にはHSCとHSPのチェックリストがありますので、気になる子や自分自身が当てはまるかどうかをチェックすることができます。ちなみに幸か不幸か、私も妻も1歳の娘も、HSPやHSCではなさそうです。私はけっこう敏感な所もあると思っていたのですが（笑）。（研究班 林幹夫）

(3) 今後の予定

6/28 (火)

FUMO (緊急支援連絡会)

かながわ県民サポートセンター R601 にて

19:00～20:45

※事前に申し込みが必要です

6/26 (日)

SCケース検討会

小田原市民交流センターUMECO

会議室9にて

10:00～12:00

※事前に申し込みが必要です

(4) KSCA連絡先

メール：office_KSCA@yahoo.co.jp

ホームページ：

<http://www.ksca.info/>

(google検索：「神奈川県スクールカウンセラー協会」)